

第2部 随筆（作文） テーマ「秋祭り」

一般の部

木島平米ブランド研究会長賞

祭り前夜

井上初美

私のふるさとである山梨県の旧塩山市は、戦国武将・武田信玄のゆかりの土地柄である。市内には神社・仏閣が数多くあり、甲州の鎌倉とも呼ばれている。そんな由縁か、昔から祭りが盛大に催されてきた。

私の生家がある地元の神社は、毎年十月十四日が祭典である。私が小学生だった昭和三十年代後半から四十年代初め、祭当日は、午後の授業が打ち切りになり、休校になるのが常だった。足早に帰宅し、小躍りしながら神社境内の商店に出かけたものだった。そんな私たちとは対照的に、母は大勢の来客の接待に忙しかつた。

祭りの数日前から食材の買い出しをして、料理の下ごしらえや作り置きをする。そして、前夜には二十本の太巻き寿司を作るのである。

太巻き寿司は来客をもてなすものであるが、各々の親戚への土産用として二本ずつ用意するので、二十本は必須であった。

祭り前夜、夕飯の片付けを終えると、母は寿司作りに取りかかる。私が大人になると、母の傍で手伝うようになり、いつしか父も加わり、三人の共同作業になっていった。

母の向かいに父が座り、甘辛く煮たカンピョウを父が束ねて母に渡し、私はそばで油揚げや卵焼き、人参、きゅうりなどの具をそろえる。たいがい卵焼きが足りなくなり、私が補充する役目に回った。

「ほれよ」「はい」と、父と母は声を掛け合い、バトシリレーのように息が合っていた。

あれから長い歳月が流れ、私はあのころの母の年齢を越えた。そして、その父と母はもうこの世にはいない。

ふるさとの秋祭りが近づくと、「ほれよ」「はい」という二人の声と、あの日々の光景がなつかしく甦ってくるのである。